

『空間・社会・地理思想』 界限 (回想録)

大城 直樹 *

Naoki OSHIRO

Memoir: The Time of Publishing *Space, Society and Geographical Thought*

以下、思い出すままに…。

この雑誌のタイトルについては、メールで「三題噺でいいんじゃないですか」といったような返事をした記憶があります。結果として地理学のみならず隣接諸領域の方にも関心を持っていただけたのではないのでしょうか。確かに英国の雑誌 *Environment and Planning D: Society and Space* の影響は大きかったと思います。ナイジェル・スリフトやその取り巻き当たりの戦略か、トレンドの変化が激しすぎて、途中からついて行けなくなりましたけど。UKの地理学界はその辺、あっさり新ネタに乗り換えていきますから。もっともそれをprogressであると評価する風潮もあるからでしょうが。1990年代ちょっと前からのRoutledge社の地理学への食い込みもすごかったですね。表象系と括られているような背中の黒い編集本が次から次へと出版されていきました。デヴィット・レイ、デニス・コスグローヴ、ジェイムズ・ダンカン、デレク・グレゴリーなどが中心にいたはずですが。また、フェリックス・ドライパー、スティーブン・ダニエルズ、クリス・ファイロらの論文からの刺激も相当受けました。文化地理学系の *Ecumene* という雑誌もそのころ発刊されました。レイが日本に来た時に實清隆先生や荒山正彦さんと一緒に関西を案内したのですが、そのとき「えきゅみん」とレイが言うのを最初は理解できませんでした。説明を聞いていると、なんだエクメネのことか、と。まさにこの雑誌が誕生する前夜でした。現実としては、印刷資本主義的なものが「地理学」の使用価値を交換価値に転換していった時期が到来していたという訳です。すなわち「地理」なるものが日本においても、地理学徒以外にも関心を持たれるようになってきたということですね。元は建築系の雑誌だと思いますが、当時INAX出版から出されていた『10+1』で1997年に、社会学者の吉見俊哉さんと思想史の多木浩二さんと水内さんと私の4人の座談(「新しい地理学」をめぐって)が掲載されました。これなど

はまさにそうした状況から生まれたものだと思います。

この雑誌『空間・社会・地理思想』(1996年-)は水内さんの肝煎りで誕生し運営され、当方も少なからず関わってきましたが、そもそも水内さんとは、何時知己になったのか記憶が曖昧です。大阪市大の院生の時に、富山大から水内さんが大軍団を引き連れて天王寺に陣を張った際(1993年か)に、ディーブサウスのどこかで会ったのが最初かも知れません。加藤政洋さんらを紹介されたのを覚えています。その後、1995年1月の震災の後、4月に大学院同窓の丹羽弘一氏が富山に水内さんが大阪市大へという交換トレード(?)がありました。当方は九州大の助手に着任したので、そこではすれ違いでした。やはり地理思想の科研費の研究集会が大きかったと思います。九大出身の堤研二さん、中島弘二さん、遠城明雄さんと知り合いになったのもこの科研でした。そして何よりも、竹内啓一先生の警咳に接しえるようになったこと。源昌久先生、高木彰彦先生も確かそうでした。ちなみに野澤秀樹先生は数年前に大阪市大の集中講義に來られていて、その時に面識を得たのでした。人文地理学会の「地理思想研究部会」では久武哲也先生のインパクトが強烈でした(指導教員の山野正彦先生もそれに劣らず)。それと、やはり日本地理学会の「社会地理学の理論と課題作業グループ」(その後「空間と社会研究グループ」に改称)。これは、この研究グループに最初から参加し支えていた大阪市大の先輩の島津俊之さんに誘われて参加したのですが、何時顔を出したのか覚えていません。1992年3月の箱根翻訳合宿には参加しているので、それ以前ですね。ニューズレターを見るとはずかしいエッセーを1991年1月発行の5号に載せていただいていますので、その直前でしょうか。1994年の秋の名古屋大学での地理学会大会ではハーヴェイを呼んでのシンポジウム「空間編成論と日本の社会・経済地理学」が開催されましたが、これには興奮いたしました。あのハーヴェイを生で見られるとは、

* 明治大学文学部

と。確かこの前後に三河三谷の国民宿舎で研究合宿があったのも覚えています。それにしても、博士課程の間際(?)で、学会の研究グループであれやこれやと言っていたのは昔の話ですね。今はもうこの階梯の方々は研究グループに顔を出してくれません。対面でのセッションが鬱陶しいのでしょうか。

この同じ年1994年11月に奈良で「場所と主体」という題で発表したことも覚えています。浜谷正人先生、高津斌彰先生、水岡不二雄先生らと言葉を初めて交わしたのもこのグループだったと思います。その前年1993年5月末には明治大学で経済地理学会第40回大会での「空間と社会」のシンポジウム(？：大会実行委員は水岡先生、島津さん、小田宏信さん)が開催され、日本近代史の成田龍一先生や社会学の吉原直樹先生とも関わりをもつようになりました。

いずれにせよ、水内さんはこうしたいくつかの学会や集団にまたがったグループを強引なまでに同じ土俵に載せて、猛獣使いというのか、誰も彼も使える人はすべて使う総力戦体制、あるいは「何でも巻き込み症候群」とでもいった状況にしてしまいました。「つべこべいわんと同じ様なもんやないか、一緒ににやる」といったノリで。

その「何でも巻き込み症候群」は日本国内に限らず、海外にまで広がって行きます。お金を見つけてくるのが得意なので、海外の大物もよく呼んでいました。ハーヴェイやソジャ、レイ、ドン・ミッチェル(大正区の沖繩居酒屋で山羊の睾丸を喰べさせた…)といった本や論文でしか知らなかった方々ですね。個人的には、EARCAGか何かの機会だったと思いますが、ブレンダ・ヨーも印象に残ってます。大阪に来た時に、シャープなその容貌とは不似合いな(と勝手に思った)白いキティちゃんのポーチを下げてましたから。

こうした大物を呼寄せて研究会を出来たことはとても刺激になったし、日本でやっていることと海の向こうの世界は、実は遠くない、地続きなんだと感じることが出来ました(正直に言えば、社会地理学はそうだったけど文化地理学はそうでもなかったのですが…)

1999年には、前年のICGCの立ち上げを受けて、韓国のChoi(崔)先生の尽力で第1回のEARCAGが慶州と大邱で行われました。これが恥ずかしながら当方の国際学会での発表デビューになりました。ニール・スミスも来ました。あのシリアスな『不均等発展』の著者がこんなフレンドリーなおっさんだったのかとびっくりしました。水岡先生のロシア語でのインターナショナル歌唱を初めて聞いたのも

この時でした(ハンガリーのペーケーシュチャバで行われたICGCでも歌われましたが、皆が驚愕してました)。ニール・スミスが懇親会でスコットランドの労働歌を歌ったのもよく覚えています。

ICGCやEARCAGの話は他にも出てくるでしょうから、ちょっと違う文脈を。水内さんを取り巻く環境で言えば、この他EAJS(ヨーロッパ日本研究協会)と日独地理学会へのコミットもあって、この関係についても少し説明しておくべきかと。ウタ・ホーンさん(アンドレアスも)や、ヴィンフリート・フリュヒター先生との関係ですね。もっとも日独については山本健児先生や大場茂明先生、加賀美先雅弘先生や山本充先生、故中川聡史君たちも関わっているわけですが。何というか、学会で活躍されている先生方が日独共に「ガチ」で向き合い討論するという点では二国間地理学会にあって、かなり刺激的にやってた方なのではないかと思います(今どうなっているのか分からないのが残念です)。

私が関わったのは、1998年の第8回(東京・大阪)と2004年の第9回(ポッフム)、中途半端な(?)形で行われた第10回(大阪?)です。EAJSは1997年のブダペストでした(この時は私は参加のみ)。ウィーンで前泊して、国立歌劇場でリヒャルト・ストラウスのよりによって渋すぎる「無口な女」に無理やりご同行いただいたのですが、お隣で爆睡されていたことを覚えています。その後プラハに立ち寄ってからブダペスト入りしました。向こうのアイスブレイクだと、三々五々集まって適当に散るというパターンですが、この時は何故か盛り上がり二次会を執行しました。フィンランドの女性地理学者らと盛り上がったのが懐かしいです。日独では当方は第8回では山本先生に頼まれて中川さんと神戸巡検を組んだこと、第9回はさておき、第10回(これがちゃんとカウントされているのか不明ですが…)で熊野・新宮で雨の中、巡検したことを思い出します。公共の宿のようなところでしたが、20人ぐらいいいた我々の懇親の席に、うるさいと言ってその筋(?)の方がクレームをつけに来られたので。雨の多い土地ですが、それぞれの神社の探訪はそれだけ深々とした雰囲気体験出来て素敵でした。こうした諸々の研究会や国際学会の人脈を活かしてこそ、『空間・社会・地理思想』の運用が軌道に乗ったのだと思います。

積極的に海外の学会に参加し、そこで人脈を作り、同じ地平で地理的想像力を働かせ、情報を共有し、何かしでかす。ちょうどWindows95の普及もあって、急速にIT環境が普及していった時期にもあたります。それまで手紙や電話・FAXでやり取りしてい

た連絡も、電子メールで気軽に、時間的ロスも無くできるようになったことも大きいと思います。そこから、この既存の「学会」では無い、緩やかなネットワークがオルタナティブな地理的場として稼働していったのだと思います。

コンテクストの別件をあと二つほど。ひとつはエドワード・ソジャの『ポストモダン地理学』の翻訳を、関西の若手を動員して行ったことです。最終的には、加藤さん、西部均さん、長尾謙吉さんとの共訳となっておりますが、色んな方に下訳をお願いしていたのです。で、その検討会が何故か当方のマンションで行われてしまった。水内さんの強引なやり口です。地人書房が店閉いをしたので青土社に出版社が変わったこともあって、結構長い時間がかかりましたが（出版は2003年）、この翻訳は世にインパクトを多少とも与えたのではないのでしょうか。

それから「空間論研究会」の存在も大きかったと思います。吉原直樹先生、吉見俊哉さん、花田達朗先生、若林幹夫さん、姜尚中さんもおられました。これは、『10+1』の座談会後に設けられたのではなかったか。沖縄での研究会では辺野古にも行きましたし、社情研、遠刈田温泉、舞洲での研究会もそれぞれに刺激的でした。この他当時「歴史的空間分析」を標榜していた水内さんは、歴史学者も巻き込み、小路田泰直さんや成田龍一さん、富山一郎さんも、科研のメンバーに巻き込んでいたはず。水内さんがホームレス研究にシフトしていくと、この辺との関係は、徐々に遠くなっていったと思います。

最後に、こうしてつらつら書き綴ってきたものの、私の『空間・社会・地理思想』への貢献はそれほど多くはありません。翻訳を若干と、朋友の石崎尚人氏のご尽力によって可能となった京都学派の地政学関係書類の掲載ぐらいでしょうか。後者については多少の自負があります。それまでタブーのように語られていた京都学派の和文タイプによる文書（表紙に「秘」のスタンプが押された）の原本（のコピー）を眼にした時の興奮は今でも忘れられません。『空間・社会・地理思想』において、地政学は大きなウェイトを占めていると思います。石井素介先生（明治大学）の回想や柴田陽一さんの大著にもつながるだろうし、久武先生の村上先生を介しての京都学派の文脈の洗い出しものすごく大きな貢献だと思います。「地理思想」の濃い領野を多少とも皮膚感覚で感じ得た経験は大きいものだったと。

さて、当誌『空間・社会・地理思想』がこれまでのような形態・体制で科研費を得られるかどうか、なかなか厳しいところだと思います。新自由主義的な

「金をもらったんだから、すぐにそれに見合う成果を上げろ」といわんばかりのアカデミアの潮流があることは否めません。そうしたやり方には竿を挿さないで来たこの雑誌のあり方では、今後従来通りに編集・発刊し続ける可能性は低くなっていくことと思います。このあたりの工夫が、一番の課題でしょうか。